

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：34310

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12792

研究課題名（和文）ブーゲンビル戦の二つの記憶 草の根からの和解に向けて

研究課題名（英文）Two memories of the Battle of Bougainville - towards reconciliation at the grassroots

研究代表者

大西 正幸 (Onishi, Masayuki)

同志社大学・研究開発推進機構・嘱託研究員

研究者番号：10299711

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本プロジェクトは、(1)ブーゲンビル戦の記憶を日本側と現地住民の体験者のナラティブを通して顕在化すること、(2)「書かれた歴史」資料も精査してその記憶表現を比較分析し多様な歴史認識のあり方を検討すること、(3)研究過程を通して両者の草の根レベルでの相互理解と和解を進めること、を目的とした。

(1)と(2)に関してはナラティブを含む多くの新たな一次資料を収集することを得、その分析に基づいて、国際太平洋歴史学会での発表や多くの出版物の出版等、予期以上の成果を挙げることができた。(3)に関してもさまざまな相互理解と和解の試みを進めたが、現地での和解は不安定な政治状況のため将来の課題として残された。

研究成果の概要（英文）：The aims of this project were: (1) to uncover the memories of the Battle of Bougainville by examining narratives told by Japanese ex-soldiers and Bougainvillians; (2) to examine diverse ways of understanding this history by looking at both oral histories and written records of the Battle; and (3) to enhance mutual understanding/advance reconciliation between Japanese and Bougainvillians.

As regards (1) and (2), we have collected many narratives and new primary sources, and on the basis of our analysis of these data we have presented our research outcomes through a presentation in the meeting of Pacific History Conference as well as in various publications. As regards (3), we have made efforts to enhance mutual understanding among all interested parties by participating in meetings, organising seminars, publishing reports in local newspapers, and others. Proper reconciliation in Bougainville, however, was left as a future challenge, awaiting a more favourable political situation.

研究分野：言語学

キーワード：ブーゲンビル 戦争体験 戦争の記憶 和解 ナラティブ パプアニューギニア

1. 研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者が、2014年10月、海外研究協力者で前ブーゲンビル大統領のジェイムズ・タニス氏とともに沖縄を訪問し、ブーゲンビル戦を体験した数少ない生存者である玉城深福氏とお会いした時の体験に端を発している。この時、玉城氏からは戦争時の現地住民と日本軍兵士間の交流や衝突の経緯が語られ、またタニス氏からは、ブーゲンビル南部パングナ地域オラミ村の住民たちに語り継がれている日本軍兵士と現地住民の衝突の経緯や、その記憶と分かちがたく結びついているブーゲンビル内戦(1988-97)の記憶が語られた。

研究代表者は、長年の言語学フィールド調査を通して、現地語話者のブーゲンビル戦体験のナラティブを記録した経験がある。しかし、この劇的な出会いの体験を通して、草の根レベルでの対話を通じての歴史理解の大切さを知り、またそのようなプロセスを通じてはじめて異なる文化的背景を持つ人々に歴史を共有する可能性が開かれることを痛感した。

ブーゲンビル島は、太平洋戦争時約3年半にわたり日本軍に占領されていた。1943年11月の時点で日本軍兵士の数は約6万5千人であったと伝えられる(蔵原1968)。当時のブーゲンビルの人口は5万人強にすぎず、日本軍兵士の数が現地住民を凌駕していたことがわかる。この戦争に関する現地住民の側からの証言の記録は、岩本洋光氏(研究協力者)が記録した8人のインタビューの映像記録の他は、ほとんど存在しない。

いっぽう、日本語文献の中には、日本軍兵士の視点からこの戦争の記憶を断片的に伝えるものがある。玉城氏の証言やブーゲンビル島沖縄県遺族会編さん委員会(1995)に寄せられた文章から、日本人兵士の中に沖縄出身者の比率が高かったこと、また、本土出身の兵士達に比べ、イモ食など生活習慣上の共通性があったため、現地住民との間に独自の交流があったこと、等がわかった。沖縄とブーゲンビルはまた、一般住民が太平洋戦争の直接の被害を被ったという共通の歴史的体験をもつ。研究を通して、両地域の協力者の間でこのような体験の共有化をはかりそれを和解の基礎とすることには、重要な社会的意義があると思われた。

また、ブーゲンビル南部はこの戦争が最も激しく戦われた場所であり、特にパングナ地域は戦争の転換点となった重要な出来事の舞台であった可能性が高い。パングナはまた、ブーゲンビル内戦の発端となりいまだにその傷跡が癒えていない地域でもある。従って、この地域を研究調査の基点とすることは学術的にも社会的にも象徴的な意味がある。この地域での研究を発端として、今後、周辺地域の戦争体験者の記憶をより包括的に記録し、そのことを通してブ

ーゲンビルの内戦後の復興や日本との友好関係の構築に寄与する可能性が開けてくると考えた。

2. 研究の目的

(1) ブーゲンビル戦をめぐる、南部パングナ地域の住民と、沖縄を初めとする日本側の戦争体験者や関係者のナラティブを、音声・映像によって記録・分析する。

(2) ブーゲンビル戦をめぐる文献資料を精査、日本語・英語による「書かれた歴史」を分析する。

(3) (1), (2)で得られたデータをもとに、ブーゲンビル南部の戦い、特に「オラミ村事件」の背景を分析してブーゲンビル戦の歴史を再構築する端緒とするとともに、より一般的には、「戦争の記憶」をめぐる歴史学の方法論の再検討を行う。

(4) 日本側とブーゲンビル現地の研究協力者や住民間の交流を通じて、両者の相互理解と和解のプロセスを後押しする。

3. 研究の方法

本研究は、大西正幸(研究代表者)、寺田匡宏(研究分担者)、岩本洋光(国内研究協力者)、ジェイムズ・タニス(ブーゲンビル在研究協力者)の4名の主要メンバーによって構成され、沖縄県・熊本県在の日本側研究者およびブーゲンビル戦関係者、オーストラリア・ブーゲンビル在の海外研究者および関係者の協力の下に実施された。

(1) ブーゲンビル戦をめぐるナラティブの記録:

日本側は、大西が中心となり、岩本・寺田の協力のもと、沖縄県・熊本県の体験者をインタビューし、戦争体験を音声・映像により記録。また、本人および遺族から多くの一次資料を収集した。ブーゲンビルに関しては、岩本が、タニスの協力のもと、2度にわたってオラミ村をはじめ南ブーゲンビル各地を調査、現地住民や関係者とインタビューを実施した。

(2) ブーゲンビル戦をめぐる文献調査:

日本側資料に関しては、岩本が防衛庁防衛研究所史料閲覧室および国会図書館にて戦史関連の資料を収集、大西は沖縄・熊本にて研究者・関係者より文献資料を収集。また岩本・大西は、キャンベラの戦争記念館を訪問、オーストラリア側およびアメリカ側の資料を収集した。

(3) ブーゲンビル戦の背景分析と歴史学方法論の検討:

(1), (2)の資料および現地調査に基づき、岩本が、オラミ村事件の経緯を再構成する

とともに、歴史学の従来の方法論の批判的検討を行った。また、寺田は、災厄の記憶の分析というより一般的観点からブーゲンビル戦の記憶の意味の検討を行った。

(4) 相互理解と和解：

大西・岩本・寺田が沖縄・熊本の体験者や遺族と定期的に接触を保ち、ブーゲンビル現地の情報や研究の進行について周知した。ブーゲンビル現地住民とは岩本およびタニスが現地では対話を持ち、日本側の和解への強い意思を伝えた。

4. 研究成果

(1) ブーゲンビル戦をめぐるナラティブの記録：

数度にわたる沖縄・熊本での調査と、ブーゲンビルでの2度の調査を通し、多くの音声・映像資料を収集。そのうち沖縄での資料は一部出版した(図書,)。残りの資料は現在編集整理中であり、将来的には同志社大学文化遺産情報科学調査研究センターのサーバーに保存し、公開可能なものについては随時インターネット上で公開する予定である。

(2) ブーゲンビル戦をめぐる文献調査：

日本側、オーストラリア側の公刊された文献や、関係者から収集した一次資料は、すべてリスト化し、主要なものはpdf化してメンバーの間で共有されている。これも将来的には同志社大学文化遺産情報科学調査研究センターのサーバーに保存し、公開可能なものについては随時インターネット上で公開する予定である。

(3) ブーゲンビル戦の背景分析と歴史学方法論の検討：

2016年5月にグアムで開かれた国際太平洋歴史学会で、岩本が、本プロジェクトの概要とオラミ事件の分析に関する口頭発表を行った(学会発表)。この発表に基づく同タイトルの論文は2019年度に出版される予定である。また、寺田の、災厄の記憶の分析という観点からの検討は、多くの著書に反映されている。(学会発表, 図書,)。なお、図書はベトナム語版も出版されている。)

(4) 相互理解と和解：

日本側の遺族・関係者とは、大西・岩本が、遺族会の会合や慰霊祭参加を通して定期的に接触し、ブーゲンビル戦に関する理解の普及を進めた。社会的な発信も積極的に行い、プロジェクトの成果は『琉球新報』、『熊本日日新聞』、『南日本新聞』等の地元の新聞に頻繁に掲載され、読者からの反応を得て、新たな一次資料の発見にも結びついた。いっぽう、ブーゲンビル現地住民には、岩本の2度にわたる現地調査を通じて

遺骨収集と住民との和解を望む日本側の強い意思を伝えたが、補償問題がネックとなって現地住民を説得するに至らなかった。研究者相互の交流としては、オーストラリアの研究者を沖縄に招聘しての摩文仁の丘平和祈念館の視察を行い、琉球大学で国際セミナーを開催した(学会発表)。

(5) 今後の課題と展望

本プロジェクトの目的のうち、(1)~(3)に関しては予期以上の成果を挙げる事ができ、岩本の太平洋歴史学会での発表によって国際的にアピールもできた。しかし、(4)の目的のうち現地住民との和解は、ブーゲンビル独立をめぐる住民投票を目前に控えた不安定な政治状況のため、十分進めることはかなわなかった。今後も息の長い取り組みが必要と思われる。

今回収集した、戦争体験者や関係者のナラティブの整理とデータベース化は今後の課題として残されている。ブーゲンビル戦の歴史に関しては、今回の研究を端緒に今後も情報の収集を進め、より包括的な姿を明らかにする必要がある。

なお、岩本は、同志社大学文化遺産情報科学調査研究センターの資金で、2017年9月後半から10月初頭かけて、ブーゲンビル現地戦跡調査、現地研究者との情報交換、および現地住民を対象にしたブーゲンビル戦の記憶をめぐる意識調査を行った。この時同行して調査を行った同志社大学4年生の大久保孝晃は、その成果を卒業論文「ブーゲンビル島における近過去歴史認識に関するフィールドワーク調査—世代・世相・社会と歴史認識—」(同志社大学文化情報学部)にまとめ、高い評価を得た。岩本と大久保は、2018年12月にケンブリッジ大学で開催予定の太平洋歴史学会にて、本プロジェクトおよびその後の継続調査研究の成果を発表する予定である。

<引用文献>

蔵原惟和(1968)『続・ブーゲンビル島』、日本談義社、熊本市。
ブーゲンビル島沖縄県遺族会編さん委員会(1995)『戦後50年記念ブーゲンビル島沖縄県遺族会会誌』、同委員会、沖縄県那覇市。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計4件)

Masahiro, Terada. '100 Years of Food: Quest for Long Life Narrative, Yanbaru, Okinawa', 2017年1月7日、FEAST Annual Assembly, 総合地球環境学研究所、京都市。

Iwamoto, Hiromitsu. 'Reconciling the Pacific War on Bougainville: A Story of Orami Village', 2016年5月19日、22nd

Pacific History Association Biennial Conference, Hyatt Regency, Tumon, Guam.

寺田匡宏「風景とともに立ち直る」2015年7月25日、「災厄からの立ち直り」研究会、京都大学地域研究統合情報センター、京都市。

Ritchie, Jonathan, Iwamoto, Hiromitsu, and Onishi, Masayuki. 「失われた声：第二次世界大戦におけるパプアニューギニアの人びとの体験記録」, 2015年5月26日、「自律型島嶼社会の創生に向けた「島嶼地域科学」の体系化」プロジェクト国際セミナー、琉球大学国際沖縄研究所、沖縄県西原町。

〔図書〕(計6件)

寺田匡宏『カタストロフと時間 — 記憶/語りと歴史の生成』, 京都大学学術出版会、京都市、2018, 888.

寺田匡宏(編著)『災厄からの立ち直り — 高校生のための 世界 に耳を澄ませる方法』, あいり出版、京都市、2016, 304.

大西正幸/石川隆二/ネイサン・バデノック「「コトバ-暮らし-生きもの環」の未来 — 奥・やんばるモデルを共有する」, 大西正幸/宮城邦昌編著『シークワサーの知恵 — 奥・やんばるの「コトバ-暮らし-生きもの環」』, 京都大学学術出版会、京都市、2016, 465-501 (529).

大西正幸「ブーゲンビル戦と沖縄」, 田中樹・石川智士・清水貴夫・遠藤仁編『人びとと出会いを考える — 総合地球環境学研究所TD 座談会記録』, 総合地球環境学研究所、京都市、2016, 121-130 (318).

寺田匡宏「神戸という記憶の<場>: 公的、集合的、個的記憶の相克とすみわけ」, 木村周平・清水展編著『新しい人間、新しい社会: 復興の物語を再創造する』, 災害対応の地域研究 5 巻、京都大学学術出版会、京都市、2015, 390 (115-160).

寺田匡宏「<場>のあり方から見た日本の近代/現代における自然災害の公的記憶 — 関東大震災と阪神大震災に関する博物館・メモリアルのトポスと建築における復興と慰霊の表象の比較分析」, ヴォ・ミン・ヴ編『災害と復興』, 日本学研究論文集 5、世界出版社、ハノイ、ベトナム、2015, 207(147-168).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大西 正幸 (ONISHI, Masayuki)

同志社大学・研究開発推進機構・嘱託研究員

研究者番号: 10299711

(2) 研究分担者

寺田 匡宏 (TERADA, Masahiro)

総合地球環境学研究所・研究部・客員准教授

研究者番号: 30399266

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

岩本 洋光 (IWAMOTO, Hiromitsu)

同志社大学・研究開発推進機構・嘱託研究員

ジェイムズ タニス (TANIS, James)

ブーゲンビル自治州政府・平和協定実施省・代行書記官